

台詞の翻訳から見た中日言語文化の差異

高 蘭雲

はじめに (1998.12.5 発表)

中国には56の民族があり、12億の人口がある。中国のテレビの普及台数は2億8600万台であり、テレビ電波の人口カバー率は87.4%である。つまり、10億余りの視聴者がいる。この数字は世界には当て嵌まる国はない。

中国は改革、開放政策を実行するにしたがって、外国の技術、経済、文化はどんどん中国に入っている。文化の一つの形である外国の映画とテレビドラマは中国のテレビ局でよく放送される。その中では、日本のドラマは相当の量を占めた。

私は近年来、日本のシナリオの翻訳に励んできた。代表的な作品というと、「おしん」、「北の国から」、「飢餓海峡」、「男はつらいよ 知床慕情」などがある。

日本の番組の翻訳と編集の中で、両国文化の相違、言葉の表現法の相違などに対して、どう処理すればいいか、どのようにして中国の視聴者に理解してもらえ、よい影響を与えられるか、それぞれの違いを埋める面で、いろいろな工夫をしてきた。

ここで二つの部分に分けて、お話ししたいと存ずる。

日本のドラマに対する印象

日本のドラマでは大部分はリアリティーで、現実に近いと存ずる。例えば、「飢餓海峡」、「男はつらいよ」、「おしん」など皆写実の作品である。それから勧善懲悪の筋道をよく踏まえ、心理描写が細かい。これらは日本ドラマの魅力であると存ずる。しかし、日本ドラマは何かはつきりと批判したり、誉めたりしない。その観点が割と曖昧で、直接に話すことをしない。それにテンポが遅くて、日本のドラマはゆっくり味われないと、その豊かな味は分らないようである。日本の舞台劇でも、映画でも、背景が割と暗くて、直接的な迫りに欠けていて、日本の独特な雰囲気漂っている。

80年代の半ば、うちのテレビ局が放送した「おしん」は大変人気

あった。このドラマの魅力はリアリティーにあるではないか。

80年代の末、倉本総氏の「北の国から」というドラマを放送した。このドラマのカットも長く、テンポも遅い方で、台詞も少なく、人物の本音もあまり言わなかった。でも、ドラマ全体の心理描写が細かくて、中国のインテリの中で評判がよかった。

とにかく、うちのテレビ局で放送した日本の番組が視聴者の印象が他の国のものより深いようである。なぜか、日本と中国の文化は近く、道徳感も近いからではないか。

中日言葉の差異

(1) 音節構造の差異

中国語の一つの漢字は一つの音節であり、ある意味を持っている。しかし、日本語は一つの音節が一つの意味を表わすこともあるが、二つ、三つ、もっと多くの音節によって、ある意味を表わすこともある。

例えば、「わたし」、中国語で言えば、「wǒ」、「ごはん」、中国語で言えば、「fàn」、「たべます」、中国語で言えば、「chī」。センテンスにすれば、「私は御飯を食べます」。中国語で言えば、「我吃饭」。日本語の11の音節は中国語に訳すと、三つの音節になってしまった。中国語は日本語より簡潔で短い。

うちのテレビ局では放送する外国ドラマは、ほとんど吹き替えなので、中国語の台詞は人物の口の動きに合わせなければならない。前の例の11の音節の台詞は少なくとも六つから八つぐらいの字で埋めるわけである。あと、三つ、五つぐらいの字を付け加えなければならない。それで、このセンテンスをこのように訳してみる。「我现在准备吃饭」、私は今ご飯を食べようと思うというセンテンスになってしまう。このように原意を損失しないように言葉を加えなければならないので、ちょっと難しい。

(2) 表現法の差異

日本語には非常に便利な言葉がある。つまり、たくさんどころに使える言葉である。例えば、「どうも」、「すごい」、「がんばって」、「楽しい」、「可愛い」、「お先に」など、シナリオにはよく出でくる。

「どうも」を例に挙げよう。しばらく会った時言った「どうも」と別れる時言った「どうも」の意味はぜんぜん違うね。その後の言葉が省略されたからである。同じ言葉でも、場合による違う意味を持っている。このような言葉に対応する中国語はない。翻訳の時、省略された言葉の意味を補って、相当する意味の中国語に訳さなければならない。

次に、複合語の例をあげる。映画「飢餓海峡」に出ている台詞。札幌の警部補「……船客係に聞くと、これまでに**よく**出航間際に走り来んでくる**担ぎ屋**がいた。」

弓坂「……あとの一人は犬飼多吉、年齢は二十八、九歳、身長約六尺、坊主頭、角ばった浅黒い顔に**不精髭**、関西なまりあり……」

傍線のついたような複合語に完全に対応する中国語はないので、吹き替え用の台詞の翻訳の場合、短い解釈か、意味の違い言葉を使うほかはない。

まだ、掛詞について例をあげる。NHK のテレビドラマ「ザ・商社」にはこう台詞がある。

A: …… がいますか。

B: いらん。

A: イランは今戦争中よ。

このような掛詞はほとんど中国語に転換できない。それで、原文の面白さとユーモアを損なうことになる。

(3) 漢字の差異

日本語の漢字と中国漢字を対照してみれば、大体5種類に分けられる。

- ① 同じ意味を持っている漢字、例えば、教育、学習など。
- ② 意味のまったく違う漢字、例えば、日本語の勉強は中国語では無理の意味で、丈夫は中国語では、夫の意味である。
- ③ そのまま訳してもいいが、ほかの意味を持つ漢字もある。例えば、対応という言葉は中国語では対応の意味を持っているが、対策の意味を持っていない。家という字は中国語では家庭、家族の意味があるが、人のすむ建物の意味はない。
- ④ そのまま訳せば通ずるが、中国語ではそういう言い方がないも

の、例えば、

救急車、精密検査など。（「お入学」NHKのテレビドラマ）
字面からみて意味がわかるが、ちゃんと中国語に訳さないと、日本語らしい中国語になってしまう。

救急車——救护车、精密検査——仔细検査。

⑤ 中国漢字にはない漢字、つまり、和製漢字、例えば、畑、辻、
笹、峠など。

中日漢字の意味の同じ場合、翻訳に便利であるが、意味の違う場合、気を付けて翻訳しなければならない。文字だけから憶測して判断することはできない。

（４）日本語の婉曲表現

たとえば、「らしい」、「ようです」、「ではありませんか」、「と
思います」。それから、句の後の部分が省略される場合も多い。例え
ば、

外科病院・待合室

午後でガランとしている待合室—貴子があたふたと来る。

姑の直枝（５８）がポツンと心細くそうに座っている。

貴子「お姑さん」

ハッと顔を上げる直枝。

貴子「花子は……？」

救急車のサイレンがとまり、看護婦たちが表へ駆け出していく——お
びえたような直枝の顔。

貴子「（不安そうに）花子はどこにッ……？」

直枝「精密検査するって、今、CTとかって部屋へ……」

貴子「生命にかかわるようなことじゃないですね……」

そこへ、直枝の次男の正彦（３０）が、貴子の母、長谷君子（５８）
と一緒に駆け込んでくる——貴子、君子を見て、

貴子「母さん……？」

直枝「（正彦を見て）正彦……？」

君子「（貴子に）正彦さんから電話いただいてね、取るものもとりあえ
ず……」

正彦「ちょうどここへ来る途中だから、長谷さんへ寄って一緒に……」

貴子「（正彦さんに）すみません、正彦さんまで……。会社が忙しいのに……」

正彦「仕事どころじゃありませんよ。花子ちゃんが滑り台のてっぺんから

落ちて救急車で運ばれたっていうんでしょう。

兄貴は会議中だし、姉さんは撮影中で連絡が取れないって、おふくろは電話口でオロオロしてるし、僕でもこなきゃあおふくろ一人じゃどうしようもないと思って……」

直枝「だからって何も長谷のお母さんまで……」

正彦「長谷のお母さんにだってひとごとじゃないでしょう」

貴子「（いらいらして直枝に）花子、滑り台のてっぺんから落ちたんですか」

直枝「幼稚園でね、男の子の突き落とされたらしいの」

君子「まあ、何て乱暴なッ」

正彦「（貴子に）花子ちゃんはどこなんですか」

そこへ救急隊員が血だらけの男を担架に乗せて入って来て、直枝たちの前を通っていく。

（「お入学」 NHK のテレビドラマ）

傍線についたところは婉曲な言い方か、省略されたところである。中国語は割と率直で簡潔であるから、これらの婉曲な言い方は中国語には表現できない。ところが、省略された部分は付け加えて翻訳しなければならない。この十七発話では六発話そのまま訳せない。直訳すれば、変な中国語になる。

（5）尊敬語、丁寧語

日本は礼儀正しい国であるといわれて、サービスは世界では有名である。日本人は非常に言葉づかいに注意しているようであるが。ほとんどの日本人の話聞いて、気持ちのいい感じがする。その一つの原因は、日本語の尊敬語と丁寧語にあるではないか。日本語の尊敬語と丁寧語と言うと、いろいろな程度といろいろな表現方法がある。中国語の中で、対応する言葉は少ない。ですから、日本語にある尊敬語と丁寧語を完全

に中国語に翻訳できない。次の例を見ていただこう。

啓子「そりゃあお父様がご病気とか海外へいらしてるとかって言うのなら仕方ございませんでしょけど……。片親だけではご両親の熱意ってものが伝わりませんでしょ。あなた方がどうしてもお嬢ちゃまを付属へ入学おさせになりたかったら、その気持ちを校長先生にわかっていただかなきゃあ……。あの学校はことにご両親の事を重く見ているところですから……」

(「お入学」NHKのテレビドラマ)

この発話に使われた9カ所ぐらいの尊敬語や丁寧語などが中国語には表現できない。

まとめ

日文中訳は直訳すればするほど、その中国語を聞いて、気持ちが悪くなるという説があるが、中国の歴史上の文人であった嚴復氏は翻訳には三つの難しいことがあると言った。即ち、「信」、「達」、「雅」とのことである。一番難しいことは「信」ということである。「信」というのは原文に対する理解と対応した言葉で表すこと、「信」だけで、「達」にならないと、外国語らしい中国語になる。「達」というのは、中国語らしい中国語でなければならない。「雅」は分かりやすいこと、流暢することである。

日本語のシナリオ翻訳者として、日本文化は正しく伝える責任のほかに、視聴者にも受けられる効果も気にしなければならない。以上の原則を覚えなければならないほかに、中国語の台詞が人物の顔つきや口の動きにぴったり合わせなければならない。そうして始めて、原作の魅力と真実感を保つことができるかと存ずる。